

より善い人類のための説教者

—— 20年代のアメリカ優生協会の説教コンテスト ——

K. J. シャフナー

はじめに

20世紀初頭のアメリカ合衆国では、社会的・経済的な変動が激しい時期であった。この変化の一つの原因は工学技術の進歩によるもので、それに連れて人は都市に移住し始めた。その中には農村住民、元奴隷や、数百万の南欧・東欧からの貧乏な移民が含まれていた。この人口移動は経済システムと政治システムに圧力を加えた。売春、アルコール中毒や、貧困のような社会問題を都市部において発生させた。この時期は労働組合、女性参政権運動、禁酒法、第一次世界大戦、経済恐慌や、人種主義および原住民保護のグループが出現した時代でもあった。このような社会における大変動の時期に、人々は科学に問題解決を求めた。科学は「客観的」・「斬新」であり、繁栄や進歩をもたらすものと見なされた。ここでは、聖職者が優生学の指針を聖書によって正当化したことについて考察をすることにする。優生学アーカイブというウェブサイトに掲載している1920年代の優生学説教コンテストに提出された原稿と優生学協会の機関誌に載せた優勝した説教原稿がこのための第一資料となった。

アメリカ優生協会の説教コンテスト

アメリカ優生協会 (American Eugenics Society) は1925年に「聖職者との協力委員会」を設置した。この委員会の最も効果的な優生学のメッセージを広げ

る対策は、1926年と1928年に開催された説教コンテストであった。(Rosen, 168, 169頁) 主要な条件は、説教がキリスト教の教会かユダヤ教の会堂で実際にされたものでなければならなかった。トピックは「宗教と優生学 — 教会は人類を改善する責任があるか —」であった。(Rosen, 120頁) 歴史学者 D. ケヴェルズによると、約300の説教がこのコンテストに関係して行われたが、そのうち60が審査の対象となり、優秀者が選ばれた。(Kevles, 123頁) 参加者の中に数人のユダヤ教のラビがいたものの、大半は主流派プロテスタントの牧師たちであった。注目すべきは、カトリック教会の司祭たちが参加していないことであった。

最初にこのコンテストのための説教原稿を見ると、牧師たちが聴衆に優生学について教育するのを感じていたことがわかる。優生学に異を唱える指針の間違いを人々に得心させ、「誤解」を解こうとした。ある説教の草案者は「優生学は公衆衛生ではなく、性衛生学でもなく、産児制限でもなく、弱者の命を奪う計画でもなく、科学的性交の計画でもなく、人を動物のように生殖する案でもない」と断固として否定した。そうではなくて、優生学は「人が誕生したときのありのままの姿に遺伝がどのような影響力を持つかを知らうとし、人類の生来の性質を改善するようにその影響力を利用しようとしている」(#36)¹⁾。優生学は「残酷なことを提案しているわけではなく、人知を人類の進化に提供することによって生まれにくいほうがよかった者を少なくしていくと確信している」ということを聞いて聴衆が安心させられた。この努めによってキリスト教信者の優生学者はきっと「イエスの率直な支持」をもらえるに違いない(#36)。「宗教に仕える者」(#56)としての科学は、聴衆に論理的であり、害のない、役立つものとして賞賛された。

1) 引用は Eugenics Archive のホームページに掲載されている説教からである。以降は特に断らない限り番号だけで示すことにする。

新約聖書の利用

ある説教者は「善きサマリア人」というイエスのたとえ話を優生学的に解釈した。聖書に登場する善きサマリア人は被害者の怪我を手当てして、旅館に連れて行って、滞在費を預けていたのに、優生学の知識を持っている現代の善きサマリア人は新しい役割を果たすだろう。すなわち、旅行者を狙う強盗を防ぐために街を見回ったり、街灯を設置したりすると同時に、「予防慈善」の積極的な奨励者になるだろう。(Rosen, 123頁) 20世紀の善きサマリア人はエリコへの旅行者を襲った強盗やそのような人々が最初から生まれられないようにできるだけの予防措置をするだろう。

イエスの「タラント」のたとえ話(マタイ25章14～30節)から、イエスは人々の能力の優劣を認め、また劣った能力を取り上げることもあり得ると解釈し優生学支持の根拠にしてしまった。また呪われたいちじくの木(マタイ21章19節)をたとえにして、イエスが実を結ばないいちじくの木を枯らしてしまったことを優生学政策である断種の正当性の根拠とした。同様に弱い者たちを聖書の毒麦(マタイ13章24～30節)になぞらえることによって、弱者を健常者の中から除外することの正当性を言いつらねた。

たとえ話の他に、マタイとルカによる福音書にあるイエスの系図は聖書に秘められている優生学的な原理を表すと考えられた。一人の説教者の言葉で、「キリストは宗教的や道徳的な淘汰の長い過程を表す家族から生まれた。彼は祭司や預言者の家系の子孫であり、その家系が歴史上で最も優れた宗教的、道徳的淘汰の産物であった」(#2)。「良いことが前途にあると期待できる環境にはいなかった」にも関わらず、イエスは「ユリのように」成長して、「…知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」²⁾(ルカ2章52節)(#56)。イエスの生涯は遺伝の環境と教育に対する勝利を表す。

「新たに生まれなければならない」というイエスのニコデモに対する言葉は

2) 聖書の引用は日本聖書協会『聖書 新共同訳』1987年からである。

ある説教の骨組みとなっていた。人は肉体的、理知的、社会的および霊的に新しく生まれる必要があるとされた（#56）。優生学は人類の発展に対する4要素の鍵を提供している。人の「…体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿」である（コリントの信徒への手紙一6章19節）からこそ、魂と同様に肉体を救う必要があるとされた。

イエスを裏切ったイスカリオテのユダは、不適合者の例として挙げられた。この説教者によるとユダは「道徳的弱者」であり、彼に対してイエスが「生まれなかった方が、その者のためによかった」（マタイ26章24節）と語られた。イエスの時代にそれが妥当であったならば、同じことが今日にも言えるだろう。生まれなかったほうが社会のためによかったと言えるかもしれないのである。「次の世代に障害が受け継がれないためにこの数百万人の再生産を防ぐことができれば、イエスが夢見た社会のよりよき秩序が実現するであろう」（#36）。ユダの行為が遺伝とどういう関係があるか、それがどういう障害であるかについて何も述べていない。「生まれなかった方がよかった」という言葉を取り上げ、当時の「不適合者」に適用した。この例で分かるように、説教の要点は聖書の指針とはほとんど関係がなかった。ユダによるイエスに対する裏切りに関する悪感情が、この実例を通して「不適合者」とされた人に向けられた。

「黄金律」と呼ばれるイエスの言葉がある。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」（マタイ7章12節）。A. ウィッガムの『新・科学の十戒』（1922年）というベストセラーにイエスの戒めを「生物学的黄金律、科学で完成した黄金律」と取り替えた。「生まれる者とまだ生まれていない者に対して、自分にしてもらいたいと思うことは何でもそのようにしてあげなさい。」一人の説教者はこれを引用して、それが科学と聖書の究極的な調和であると主張した（#56）。

旧約聖書の利用

説教コンテストの参加者が使った聖書の箇所は新約聖書に限られたものでは

なく、その上、優生学の理想は聖書全体に存在していると見なされた。墮落した性質が世代間で受け継がれているという主張を支持するために、ある牧師は神が「…父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う…」(出エジプト記20章5節)という聖句の一部を引用し、「神は父親の罪が生まれてくる世代の血統に残る」と警告し、科学者が確立してきた「血統がものを言う」という恐ろしい遺伝の法則を指摘している。「親から子どもへと受け継がれていく犯罪行為、精神病、知的障害、結核、アルコール中毒などの邪悪な墮落が、私たちの生殖質に宿っているので、生まれる前から既に私たちの子どもが罰せられている。」次に説教者が指摘したように、ソロモンとヤロブアムの不道徳は息子たちに受け継がれ、「脳ミソが腐り、良心が腐敗し、同様に遺伝された不道徳によって着実に墮落していった人民に対する王権が終には揺らぐ羽目となった」(#43)。

「今の人の姿は祖先によって決まる」と証明するもう一つの箇所はサムエル記上17章58節であった。サウロは巨人ゴリアテを打ったダビデに聞く。「少年よ、お前は誰の息子か。」この箇所を使った説教者によると、サウロのダビデの家系に関する質問は、彼が「個人にとっても人類にとっても血統が強烈にものを言う」(#2) ことを知っていたということになる。英雄は一つの瞬間に現れるものではなく、遺伝の結果であるとされた。

一つのコンテストで優勝した説教はマラキ書3章2～3節を引用して、「怠惰、無知、猥雑、非道、貧困、疾病、精神疾患、精神異常や、犯罪者」を金や銀の精練の過程で取り除かれる異物にたとえた。優生学者は「神の国」が到来する夢を教会、家庭、学校や、国家の協力を通して実現しようと考えた。

終わりに

説教コンテストの参加者は優生学に対する強い興味を見せた。ある者は優生学を「暗闇と陰気を追い払い、私たちの視野を広げ、進歩的な文明に対する新たな、広い観点を与えるための世界の暗い夜に現れた輝く星」(#56)と呼ん

だ。優生学の旗印の元で集まり、この聖職者は優生学のメッセージを広げるといふ挑戦を受けて、自ら進んで優生学の伝道師になった。

コンテストに提出された説教自体は特にオリジナルなものではなかった。ほとんど差のない実例、聖書の箇所や、参考文献が使われていた。説教に出てくる聖書の箇所の注釈はほとんどなかった。ほとんどの場合その箇所は元の文脈から切り離されて、優生学の考えに権威の見せ掛けを与えるための立証テキストとして使われていた。彼らにとっては、聖書は参考文献の一つに過ぎなかった。

引用された専門家の言葉や参考文献は、優生学の偽生物学的な理論的根拠を表す。優生学は望ましい形質と望ましくない形質を意味する「人種の純血」を支持した。この牧師たちが下した「アメリカ人種」を救うための行動に対する結論は、間違った知能検査と誤った家系研究に基づいていた。真剣な社会問題に直面するとき、彼らにとってその解決が自分たちの自由を制限しない、自分たちの社会的地位を脅かされていないから、どんな証拠でも受諾しようと考えた。他方、社会の利益を守るためと見なされるとき、他の人が子どもをつくる自由を制限したり、アメリカに入る自由を制限したりすることを平然とやってのけた。彼らは偏見の科学的な根拠を見つけ出した。彼らは科学的な細部に焦点を合わせるよりも、優生学の社会的な側面に焦点を合わせた。

積極的に考えると、優生学の宗教関係者に対する魅力は、作り変えられた世界の幻、普遍的で、平和と正義に満ちている永遠の国の夢にあった。同様に急成長している社会問題に対する関心とその勝ち目のない戦いに対するフラストレーションの当然の結果として見られる。消極的に考えると、彼らの支持が優越感、偏見やプライドから生じるものであると考えられる。

優生学の傘は大きくて、広範な理念や意見を含んでいる。その曖昧さのお陰で、様々な立場の人が優生学の支持者となった。ほとんどの人にとって優生学はその人の望む姿を見せた。優生学の解釈は、大体人が望んでいた意味通りになった。当時の遺伝メカニズムの理解は単純化したもので、遺伝子の相互作用の複雑さと、その作用の可能性が広範囲にわたることを理解していないことは

明らかである。しかし彼らは科学が人類の悲惨な状況を解決できることを確信していて、優生学を認めない人を時代遅れや宗教的に偏狭であると非難した。

2008年4月30日のメソジスト教会（United Methodist Church）の年次総会で、各教会の代表が「優生学支持についての悔悟」（Repentance for Support of Eugenics）という宣言を行った。ここで一部を引用することにしたと思う。

「教会における優生学支持者たちは大抵の場合、積極的な優生学，すなわち配偶者の慎重な選択を支持した。しかし白人と非白人の婚姻を制限する婚姻法とともに，断種が受容可能な類の優生学となった。幾度もの年次総会で，そのような法律が支持され，反対はわずかだった。」そのように聖職者も一般信者も積極的に優生学を推進したことを認め，優生学の名で人々の人権損害に賛成したことを明確にして，それを悔い改めようと決議した。

参考文献

第一次資料

“Petition Text” <<http://calms.umc.org/2008/Text.aspx?mode=Petition&Number=1175>>

“Eugenics and the Church—Three prize-winning sermons,” *Eugenics—A Journal of Race Betterment*, 2: 8 (August 1929), pp.3-19.

Sermon #2. Eugenics, AES Sermon Contest 1926 #2

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=768>

Sermon #19. AES Sermon Contest 1926, #2

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=778>

Sermon #36 “Eugenics” AES Sermon Contest 1926 #4

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=781>

Sermon #40. “For Our Children’s Sake, the Evangel of Eugenics” AES Sermon Contest 1926, #4

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=786>

Sermon #42. “Eugenics,” AES Sermon Contest, 1926 #5

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=787>

Sermon #43. “Religion and Eugenics” ca. 1926

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=791>

Sermon #56 “Eugenics” AES Sermon Contest, 1927 #6

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=801>

Sermon #57 “Eugenics” AES Sermon Contest, 1927 #7

<http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/image_header.pl?id=812>

Wiggam, Albert E. *The New Decalogue of Science*. New York: Bobbs-Merrill Company, 1922.

第二次資料

Bozeman, John M. “Eugenics and the Clergy in the Early Twentieth Century United States.”

Journal of American Culture, Vol. 27:4 (December 2004), pp. 422～431.

Durst, Dennis. “Evangelical Engagements with Eugenics, 1900～1940,” *Ethics and Medicine*.

Vol. 18:2 (Summer 2002), pp. 45～53.

Kevles, Daniel. *In the Name of Eugenics*. New York: Knopf, 1985.

Leon, Sharon M. “Hopelessly Entangled in Nordic Pre-suppositions: Catholic Participation in

the American Eugenics Society in the 1920s.” *Journal of the History of Medicine and Allied Science*, Vol. 59:1 (January 2004), pp. 3～49.

Pickens, Donald K. *Eugenics and Progressives*, Nashville: Vanderbilt University Press, 1968.

Rosen, Christine. *Preaching Eugenics: Religious Leaders and the American Eugenics Movement*. New York: Oxford, 2004.

*これはカトリック神学院福岡キャンパスにおける 2009 年度日本基督教学会九州支部 (2010 年 3 月 30 日) で発表したものである。